

夫が殺された衝撃は重く、私一人だったら押しつぶされていたと思う。事件から15年経った日に放送されたドキュメントドラマの台本に、こんなナレーションがあった。「涙に暮れる遺族として日々を過ごしているころの姿はもうない。高橋シズエとして、今も事件と向き合い続けている」。

事件を起こしたオウムに、そして今も活動している信者たちに「怒り」を持ち続けているのは、被害者や遺族を支援して下さる弁護団の、故坂本堤弁護士の意志を継ごうとする「誓い」を強く感じているからだ。

転じて、夫はどうなのだろう、と思った。

先だって、間もなくお彼岸というある日、お墓を掃除していると、紳士が静かに近づいてきた。私がいなければ、人知れずお墓参りを済ませていたに違いない。名刺を差し出した紳士は、その後、現在の東京メトロの代表取締役社長に就任された人だった。

夫の死、地下鉄サリン事件の衝撃、そして未だに不穏なオウム信者たちを、誰も忘れてはいないのだと思った。

(令和2年1月6日記)

[手記「『事件から24年』に際して」\(平成30年度\)へ](#)
[手記「『事件から23年』に際して」\(平成29年度\)へ](#)